山寺の怪

田中貢太郎

宿の主将（ていしゅ）を対手（あいて）にして碁（ご）を打っていた武士は、その碁にも飽（あ）いて来たので主翁を伴（つ）れて後（うしろ）の庭へ出た。そこは湯本温泉の温泉宿であった。擂鉢（すりばち）の底のような窪地（くぼち）になった庭の前には薬研（やげん）のように刳（えぐ）れた渓川（たにがわ）が流れて、もう七つさがりの輝（かがやき）のない陽（ひ）が渓川の前方（むこう）に在る山を静（しずか）に染めていた。山の麓（ふもと）の渓川の岸には赤と紫の躑躅（つつじ）が嫩葉（わかば）に刺繍（ししゅう）をしたように咲いていた。武士の眼は躑躅の花に往った。躑躅の花は美しかった。武士の眼は山の方に往った。それは低い山ではあるが蒼（あお）い天鵞絨（びろうど）のように樹木の茂った峰であった。武士はその山の形が気にいった。武士は主翁の方を見て云っ

た。

「あの山へ往ってみようか」

「あ、あれでございますか」

主翁はちょっと困ったと云うような顔をした。

「夕飯（ゆうはん）には、ちょっと間（ま）がある、往ってみよう、腹こなしにはいい」

「あすこは、お山の方達（だち）の遊ぶ処でございます、七つすぎましては」

「なに、お山の方達じゃ、お山の方達とは、天狗（てんぐ）か、木精（すだま）か」と、云って武士は笑って嘲（あざ）けるように、

「わしはまた、ただの山かと思ってたら、そんな処か、

それならなおさら面白いじゃないか」
「そ、そ、そんなことを、おっしゃるものではございません。殁(な)くなった私の父親も云うておりました、知らずに入ると何もないが、それを知って入ると、何かしらお咎(とが)めがある、強情なお客様が入って往って、帰らなかったこともあれば、迷い込んでお遊びになっておるところへゆきかかって、病(やまい)になった者もあるそうでございます、お客様、私はでたらめは申しません」
「主翁(ていしゅ)、わしの腰に何があるか見てくれ、わしも天下の御連枝(ごれんし)、紀州侯(きしゅうこう)の禄(ろく)をはんでいるものじゃ、天狗や木精がいると云うて、武士が一度云いだしたことが、

後（あと）へ退（ひ）かれるか、お前が恐ければ、わし一人で往く」

武士は紀州から江戸の邸（やしき）へ往く路（みち）で、あまり急がなくてもいいから二三日滞在しているものであった。律義者（りちぎもの）の主翁は己（じぶん）の家の客を恐ろしい処へやって、もし万一のことがあっては旅籠（はたご）としての瑕（きず）にもなると思ったので強（し）いて止めようとした。

「それでもお客様、この箱根のお山には、昔から……そうした方様達がお遊びでございますから」

「そんなばかげたことが、世の中にあってたまるものか、お前はおれ、武士がひとたび云いだしたからには、後（あと）へ退（ひ）くことはならん」

「それでもお客様」

「いやならん、わしは往く」

武士はそのまま庭の右に廻って往った。そこには竹の栞戸(しおりど)があった。武士は渓川(たにがわ)の縁(へり)に往くに一二度そこを出入り(ではい)していたのでかっては知っていた。武士は栞戸(しおりど)を開けて外に出た。そこは草や雑木(ぞうき)の生えた小藪(こやぶ)になっていて、すぐ右手に箱根八里の街道へ脱(ぬ)ける間道(ぬけみち)があって、それがだらだらとおりて土橋(どばし)を渡り、前岸(ぜんがん)の山裾(やますそ)を上流に向ってうねうねと通じていた。武士は小藪を脱けて間道に出、それから土橋を渡って間道から岐(わか)れて左手の方へ往っている小径(こみち)をあがろうと

した。

　そこには栗のような木の枝が眼の前に垂れていた。武士は見るともなしにそれに眼をやった。それには枝に後半身を巻きつけた鼠色の縞蛇の丈の一間位もありそうなのが半身を躍りあがるように宙に浮かしながら、武士の眼の前に鎌首をもったてて赤い舌を見せていた。武士はちょっと立ちどまった。蛇はそのまま体を放して下に落ちて篠竹の茂りに隠れて往った。そのあたりは前岸から見ると草山のようになっているが、人の背たけほどもあるような箱根名物の篠竹と樹木が絡みあっていた。武士はこんな山ではとても見はらし

がきくまいと思った。武士はあがるのがおっくうになって来た。そのとき武士は踏みだした右の下駄（げた）で、枯木のようなそれで柔（やわらか）なぐびりとしたものを踏みつけた。武士は不思議に思って一足（ひとあし）すさった。そこには三尺あまりもありそうにおもわれる黒い鱗（うろこ）のぴかぴか光る胴体があった。武士の手は刀の柄（つか）に往った。蛇はおちつき払っているように動きだして、ざらざらと云う音をさしながら胴体を右の方へ脱いで往った。武士の手はまだ刀の柄にあった。と、蛇は尻尾（しっぽ）の切れた青く生（なま）なました傷痕（きずあと）を見せながら姿を消してしまった。武士は気が注（つ）いたように髯（ひげ）を剃（そ）った痕（あと）の蒼（あお）あおとした

隻頬(かたほお)に笑いを見せながら歩いた。

路(みち)は篠竹と樹の絡みあって谷底のようになった処をあがったりおりたりした。武士は時おり脚下(あしもと)に眼をやった。毒だみのような葉をした草が一面に生えていた。路の遥(はるか)の下の方で、どう、どう、ど、ど、どうと云うような音が聞えて来た。渡って来た渓川(たにがわ)の音であろうか。

篠竹と樹木の絡みが次第に濃くなって来た。武士は両手にそれを押し分け押し分けして往った。分ける後(あと)から篠竹と樹木は音もなく絡みあった。武士は篠竹と樹木の絡みが濃くなるにしたがって勇気が出た。十町

ばかり往ったと思う比（ころ）、天鵞絨（びろうど）の峰の頂上が篠竹と樹木の絡みあった前方に夕陽を浴びて見えた。そこは平地になって樹木と篠竹の茂（しげり）が遠のいて一面に木の花が咲いていた。それは何の木とも名は判らないが、桜のような、椿（つばき）のような、木蓮（もくれん）のような、牡丹（ぼたん）のような、梅のような、躑躅（つつじ）のような、そうした花が一面に咲いていた。天鵞絨（びろうど）の峰はその前に仮山（つきやま）のように畝（うね）りあがっていた。そこは窪地（くぼち）のようになって遠くの見はらしはなかったが、お花畑のように美しい場所であった。花の木には鶯（うぐいす）のような小鳥が枝から枝を飛んでいた。雲雀（ひばり）のようにきりりりんりんと鳴きながら空にあがって

往く小鳥もあった。空は霞(かす)みだってあがって往った鳥は、暫(しばら)く姿を消して鳴声ばかり聞えていたが、やがて勢(いきおい)よく斜(ななめ)におりて来て花の中に隠れた。林の下は青毛氈(あおもうせん)を敷いたように芝草(しばくさ)が生えていた。武士はこんな佳(い)い処があるのに主翁(ていしゅ)は何(な)んのよまよいごとを云ってるだろうかと思った。武士は下にさえこんな佳い処があるから、頂上にはまだ佳い処があるだろうと思った。武士は早く頂上へ往って日の暮れないうちに旅館へ帰ろうと思った。彼は前の方を見た。芝草のような草の間を流れている水の澄みきった流れが前を横ぎっていて、それには一枚石が橋のように架(かか)っていた。武

士はその石を渡って花の林の中へ入って往った。花の枝から枝に移る小鳥、空にあがって往く小鳥の声、脳に浸(し)みるような花の匂(におい)。

僅(わず)か一町くらいしかないように見えていた花の林は長かった。武士は不思議に思いながら七八町ばかりも往ったが林を出はずれないので立ち停(ど)まった。立ち停ったはずみに古い古い小さな門を見つけたのであった。

「寺らしいぞ」

武士の固くなっていた気もちがほぐれてしまった。

武士は好い気もちになって門の中へ入って往った。そ

れは一室(ひとま)しかないような小さな寺で、戸締(とじまり)のない正面の見附(みつけ)の仏壇の上には黒く煤(すす)けた金仏(かなぶつ)が一つ見えていた。庭は荒れて雑草が生えていた。武士は何人(たれ)かいないかと思って見附へ往った。そこは縁側(えんがわ)もなかった。室(へや)には藺莚(いむしろ)のような黄(きい)ろくなった筵を敷いてあった。武士の眼は再びゆくともなしに仏壇の上の仏像に往った。仏像の左の眼は潰(つぶ)れていた。武士は未(いま)だかつて隻眼(かため)の仏像を見たことがなかったし、またあるべきはずもないと思ったので、眼のせいではないかと思って見なおした。しかし、やっぱり仏像の左の眼は潰れているのであった。武士は不思議な仏像もあるものだと

思って、ふと室の左の方へ眼をやった。そこには老僧と小僧が差向って碁(ご)を打っていた。老僧は痩(や)せてひょろひょろした体に鼠(ねずみ)色のどろどろした法衣(ころも)をつけていた。武士は老僧に詞(ことば)をかけようと思った。左斜(ひだりななめ)にこちらを見ている老僧は右の眼が開(あ)いて左の眼が潰れていた。武士はおかしくもあれば驚きもして見るともなしに小僧に眼をやった。右斜(みぎななめ)になっている小僧も右の眼が潰れていた。

「仏像も、和尚(おしょう)も、小僧も、隻眼(かため)とは何事だ、よくも揃ったものだ」

武士は驚いて仏壇の方を見た。仏壇の側(そば)には羅漢(らかん)が

立っていたがその羅漢像もそれぞれ一方の眼が潰れていた。武士はまた天井を見た。天井には群青や朱の色の重どろんだ絵具で天女と鳳凰を画いてあったが、その天女も鳳凰も同じように一方の眼が潰れていた。武士はまた右の方に眼をやった。そこには古い絵具の剝げかけた壁画があって、鶴や亀や雉子のようなものを画いてあったがそれも悉く一方の眼が潰れていた。左のほうの老僧と小僧のいる方の壁にも壁画があって、獅子や麒麟のようなものが画いてあったがそれも隻方の眼が潰れていた。武士はますます驚いたが強いて気を張って老僧を見た。

「ここは何と云う処かな」

老僧は蒼（あお）い悲しそうな顔を顫（ふる）わすようにした。

「はい、はい、ここは隻眼山一目寺（せきがんざんいちもくじ）と云う寺でございます、ここは人の来る処ではありません、どうしてここへ来なされた」

老僧の詞（ことば）は小さなじめじめした泣くような詞であった。

「そうか」

武士は己（じぶん）で己の体がじゃんびりしたように思った。武士は心が落ちつかなかったがそのまま引返すことはその自尊心が許さなかった。武士はそのまま下駄（げた）を脱

いで上へあがり、つかつかと仏像の前へ往って懐（ふところ）の財布（さいふ）から小粒の金（かね）を出してそれに供（そな）えた。

「これでどうか、一方の眼も開けてください」

と、仏像ががっくりと黒い口を開けて、は、は、は、はと笑った。仏像についで羅漢（らかん）像も、老僧も、天女（てんじょ）も、鳳凰（ほうおう）も、孔雀（くじゃく）も、鶴も、雉子も、獅子も、麒麟も、人の画も、形のある物は皆大声に笑った。それは無智（むち）な者を笑うおかしくてたまらないと云うような笑い方であった。武士の頭は恐れと驚きでぼうとなった。武士は這（は）うように起（た）ちあがって逃げだして下におり、下駄（げた）をそそくさと穿（は）いて門の外へ出た。もう外は微暗（うすぐら）く

なっていた。

「旦那、旦那、籠(かご)は如何(いかが)でございます」

武士は声をかけられて初めて吾(われ)に返った。そこには一挺(ちょう)の山籠(やまかご)を据えて籠舁(かごかき)が休んでいた。武士は一刻も早く鬼魅(きみ)悪い場所を離れたかった。

「そうか、それでは湯本の宿屋までやってもらおうか」

籠舁は相棒に声をかけた。

「おい兄弟、旦那が載ってくださると云うぜ」

「そいつはありがたいや」

籠舁は肩をかえて呼吸杖(いきづえ)を持ちなおした。武士は傍に寄ってそれに乗ろうとして、見るともなしに前にい

る籠舁の顔を見た。鼻の赤い恐そうなその籠舁の左の眼も潰れていた。武士はもしやと思って後の籠舁の顔を見た。その籠舁の左の眼も潰れていた。武士はまたびっくりしたが弱味を見せてはいけないと思ったので、強いて傲然として籠に乗った。

「おかしな奴ばかりだな」

すると後の籠舁が云った。

「旦那、わっしだちゃ、近道を往きます、眼を開けていると気もちが悪うございますから、ちょっと眼をつむってておくんなさい」

武士は怪しいそぶりがあれば打ち放そうと思った。

「そうか、つむってぃよう」
前の籠舁が云った。
「ようがすかい、眼の二つある者は、あっちかこっち
かに迷いますからね」
武士は傲然として云った。
「そんなことはどうでもよろしい、早くやれ」
後（うしろ）の籠舁がだめをおした。
「それじゃ旦那、開けろと云うまでは、つむってお
くんなさいよ、あけちゃだめですぜ」
「よろしい」
同時に籠は地を離れた。籠舁の掛声とともに武士は

眼をつむって用心していた。路(みち)は凸凹(でこぼこ)がないのか、それとも籠舁の足は宙を踏んでいるのか、すこしも踏みごたえがなかった。

籠は非常な勢(いきおい)で進んで往った。突き切って進む風の音が耳の後(うしろ)のほうでびゅうびゅうと鳴った。武士は籠舁どもがどんな処をどんな容(ふう)にしてやっているだろうと思って、見たくもあれば不思議にも思ったが、約束があるので眼は開けなかった。

籠に羽が生えて飛んでいるように思われて来た。風も冬の風のように冷たくなってきた。耳はその風のために裂かれているように痛かった。

「眼を開けてはならんぞ」

「そうだ、もうすぐだから」

籠舁の詞（ことば）は初めと打ってかわって威厳があった。籠足はすこしもゆるまなかった。耳の後（うしろ）で鳴る風の音は嵐の音のように聞えてきた。武士はもう宿に著（つ）くだろうかと思った。と、籠足はぴったり停まった。

「それ著いた」

「おりるがいい」

武士は眼を開けた。同時に籠が傾いた。武士の体は下に落ちた。びっくりして夢の覚めたようになった武士は、己（じぶん）の体が暗い地の上に立っていることを知った。

彼は手荒（てあら）な籠舁の所業（しわざ）を怒ることも忘れて四方（あたり）を見まわした。そこは大きな邸（やしき）の前で、左右の長屋の武者窓（むしゃまど）の隙（すき）から燈火（ともしび）が処どころ漏（も）れているのを見た。後（うしろ）の方を見るとそこにも大きな邸の土塀（どべい）があった。人もぼつぼつ通っていた。

「箱根にこんな処はない」

武士は四辺（あたり）をじっと見たがどうしても場所の見当がつかなかった。二人伴（つ）れの男が提燈（ちょうちん）を持って左の方から来た。武士は声をかけた。

「しょうしょう物を尋ねたいが、ここはどこであろう」

提燈を持った男が足を停め提燈をあげて武士の顔を

透（すか）すようにした。

「ここは——の紀州さんの邸前（やしきまえ）だよ」

「なんと申す、——紀州さんの邸前、それではここは江戸か」

武士は驚いた。対手（あいて）の男は伴れと顔を見合わすようにした。

「江戸も江戸も大江戸の——町だよ」

「そうか、ふん」

武士は考え込んだ。そして、温泉宿の主翁（ていしゅ）の云った山の方達に酷（ひど）い目に逢（あ）わされたと云うことを知った。それとともに紀州藩の武士ともあろうものが、天狗（てんぐ）

木精(すだま)のためにこんな目に逢(あ)わされるとは、何たることだと思って口惜(くや)しかった。口惜しい一方で、もしこんなことが公(おおやけ)の沙汰(さた)にでもなろうものなら、どんなお咎(とが)めを蒙(こうむ)るかも判らないと思った。それは一身一家(いっしんいっか)にかかわる大事であったが、しかし、幸いに夜(よ)であって己(じぶん)さえ云わなければ何人(たれ)も知っている者はなかった。武士は安心した。彼はつかつかと藩邸の小門(こもん)の口へ往った。

「頼もう」

そこには門番がいた。

「身どもは国おもてから使(つかい)にまいったものだ」

武士は中へ入って手続(てつづき)をふみ、己の住居することになっている長屋へ入った。長屋の両隣(りょうとなり)には心安い人がいたが、もう夜(よ)が更(ふ)けているのでその夜(よ)はそのまま寝ることにして寝た。そして、何かの拍子に眼をさましてみると有明(ありあけ)の行燈(あんどう)の傍に人影があった。武士ははっと思った。それは痩(や)せてよぼよぼした鼠(ねずみ)色のどろどろした法衣(ころも)を着た、見覚えのある蒼(あお)い顔の左の眼の潰(つぶ)れている老僧であった。

「おのれ」

武士が刀に手をかけた。老僧の悲しそうな地の底からでも聴えて来るような小さな顫(ふる)いを帯びた声が聞え

てきた。

「そんなにいばったところで、人間は草の露（つゆ）のようなものじゃ、いつどうなるか判るものでない」

「何をッ」

武士はいきなり刀を抜いて切りつけた。老僧の姿はそのまま煙のように消えた。武士は室（へや）の中を見てまわったがもう何もいないので刀を鞘（さや）に納めて寝た。そして、また何かの拍子に眼をさましてみるとまた彼（か）の老僧が行燈（あんどう）の側（そば）に坐っていた。老僧の泣くような悲しそうな地の底から聞えて来るような小さな声がまた聞えて来た。

「人間の生命（いのち）は草の露（つゆ）のようなものじゃ、いつどうなるか判らない」

武士はまた刀を抜いて切りつけた。老僧の姿はまた消えてしまった。

老僧の姿はその夜（よ）をはじめとして武士の枕頭（まくらもと）にあらわれた。それがために武士は病気になってしまった。そうしているうちに老僧の姿は昼もあらわれて見舞に来ている人もそれを見るようになった。武士はだんだん衰弱して彼（か）の老僧のように痩（や）せて来たがとうとう死んでしまった。

その後その武士のいた長屋に入る者があると、きっと怪しいことがあった。

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　２００３（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「日本怪談全集」改造社
１９３４（昭和９）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
２０１０年11月13日作成

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。